

倫理 — 教育の過去と未来

—— 今こそ枠組み転換を ——

序 論

本シンポジウムのテーマは「倫理の教育」である。これを論ずるには、倫理、教育を論じる必要がある。本論の論旨は表題のとおり、両者共に過去のものは、時代遅れ、時代不適應であり、未来のために、今根本的枠組み転換が必須であるということにある。

生物はどれだけ「真理を知り、倫理を行う」かによってそれ相應の世界を享受し、共有する。「知」についてはブッダの「群盲撫象」の譬喩がある。人間の起こすテロ、戦争、天災、地変を初めとする地球問題群は群盲が無知にして騒擾を起こすに等しい。「行」については「鳥巢尊者」の実話がある。鳥の巢のように樹上修行の尊者にその地の長官として赴任した著名人白樂天が「危ないぞ！」と叫ぶと、「危ないのはお前の方だ」と尊者は言い、

吉 田 收

「仏教は何を教えるか」の問いに「七仏通誠偈」とされる「諸善奉行、諸惡莫作、自淨其意、是諸仏教」を引用した。「そんなことは七歳の小兒も知る」と言う白樂天に「八〇の老翁といえどもなし得ず」と尊者は論じた。全体真理の無知、普遍倫理の不行が一切問題の根源になっている。

無知妄信で輕率盲動すれば大規模強力な現代機構の損害は計り知れない。「知は力」としたベーコンは「科学的知識が全てを解決する」として「新しいオルガノン」を提示したが、「分科の学問」である科学は「総合の学道」が必要である。「知は力」ではなく真知による「行が力」である。知行のうち、知は間接的效果をもち、行は直接效果をもつ。したがって行動の規範である倫理は実質的に最も重要な問題である。真理の知、倫理の行の教育、なканずく、知識偏重の現代において「倫理の教育」は人生問題、

地球問題群の解決において最も緊要の課題である。今回のテーマは誠に的を射たものである。

あるギリシャの哲学者は「智慧を持っていないなら首を括る縄を持って」と言った。俗習、旧習の教育は害を及ぼす故にすぐにやめたほうがよく、新たに教育の目的や方法は徹底的に追究されなければならぬ。道元が中国で一生懸命先人の語録に学んでいたある日、西川の僧が問う、

「何の用ぞ？」

「故人の行履を知らん。」

「何の用ぞ？」

「卿に帰って教化せん。」

「何の用ぞ？」

「衆生を利益せん。」

「畢竟して何の用ぞ！」

以後道元はひたすら坐禪弁道して「眼横鼻直」を明め、「空手還卿」、山河大地心をもつて衆生を利益している。「究極の所如何」と「究極の真理」を知らず、「普通の倫理」を行わず、世俗の名利の二船に溺れ、三毒（貪瞋痴）を飲んで、心病み、命失う故に、「世界は熾燃として燃え」「涙の大海」がある。

地球生命系に生まれながら、今や異常増殖して母体を脅かす癌のごとき人類の文明系は地球規模に地球生命を破局に向かわせる地球問題群を引き起こしている。その規模と重大さから、今や倫

理も教育も共にその知行の枠組みを根本的に転換する必要がある。以下に四諦の方法に倣って、一、問題、二、原因、三、解決、四、方法の順でこの問題を扱う。

本 論

一 問 題

おぞましい事件や戦争、おそろしい災害や惨禍の激化は末世、破局を思わせ、解決不能の絶望を抱かせる。しかし、これは小見焦慮の妄想こき、為損じてあり転換可能である。七〇年代ニューヨークの地下鉄で見たポスターにはアメリカインディアンが頬に一筋の涙を流している写真に「Man started pollution. Man can stop it.」とあったが、汚染はやむどころか増加の一途をたどり、「奪われし未来」「世界の終わり」などの本が陸続と現れ出てくる。これらの問題、苦悩は人間が原因であるから、人間問題群であり人間が解決しなければならない。その解決方法は人間の誤った知行を転換するしかない。今こそ群盲無象で争う愚をやめ、泡沫人生を無限の大海のごとき生命共同体の享受、共受に転換すべき秋である。

地球は今や地球体系規模の地球生命危機をもたらす地球問題群を抱えて倫理・教育の根本的枠組み転換を必要としている。地球問題群とは地球規模の地球生命の諸問題（地球温暖化、生物種絶滅、環境汚染、資源枯渇、人口爆発、食糧危機、戦争テロ、格差

拡大、価値混乱、異常犯罪、生活不安等）が相互関連した不可分一体の問題であることをいい、これは人類の文明そのものに起因する。

人類は「物と力の文明」（二万年前の生産革命、五〇〇〇年前の社会革命）、「心と命の文化（culture）」（二五〇〇年前の精神革命、五〇年前の環境革命¹⁾）を發展させてきた。前者は有限を競争で分捕り、後者は無限を協調で分与する。文明（civilization＝都市化）は単純、分明な物、力によって金字塔人造を作り、複雑、深遠な心、命の循環型自然を欺瞞し、犠牲としてきた。

都市化は都市国家を生み、内外に差別（身分、人種、奴隸、女子等）、搾取（税金、徴用、植民、乱獲等）、殺戮（戦争、死刑、種滅等）をし、現代の国民国家に至るまで金字塔機構を強化し、グループ内外に倫理、教育の適用を峻別している。二〇世紀は「国家の世紀」、「戦争の世紀」といわれるが、「国家」の故に「戦争」があり、国家の外部者には「不殺」、「不盗」、「不偽」などの倫理は適用されない。国家は愛国の名目で差別、搾取、殺戮を教育する。また国家の枠を超えて教育権、参政権等は及ばない。倫理の教育は偏向、逆行さえする。

今や、地球問題群は地球的破局に向かい、旧来の枠組みは不適不能となり、地球的倫理・生命的教育への枠組み転換なしにはその解決は望めない。ここに現今の倫理、教育の根本問題がある。

二 原因

軸時代の文化はそれ以前の「物と力の文明」を「心（知情意、真善美、科学芸術倫理）と命（生、聖＝全／健全、宗教）の文化」に一八〇度の転換をするが、時所の制限を受け、真理／倫理は時代社会の限界を持った。倫理の原語、ethos (ethic, Ethik, etc.) はグループの「習俗」であり、その限界を伴いやすい。その根源は自我中心の限界にある。

罪は自我が一切から離れているという根源的誤謬（心身世界が縁起したものであり、相依、相対であると洞察できない根本無明）（罪＝sin＝separated）による。自我意識は業（動作とその習慣による分別）による動物に特有で、更に言語をもつ人間に特殊強力なものである。罪と罰、無明と苦悩は人間に独特甚大である。動物、人間である故に、身体、精神をもって自我とするが、これらは地水火風空等と不可分であり、これらなしには存在、機能共に不可能となる。一切が重々無縁縁起の現象であることが究極の真理（勝義諦）であり、倫理（相依、相対・共同、共生）と成るべきである。しかし世俗の真理（世俗諦）では自我は独立不変とされ、倫理の出発点になっている。「存在」の根本的な「認識」の誤謬、無明が出発点となって「価値」が設定され、「行為」が実践される。この過程が人生の諸苦、世界の諸悪を生み出している（仏教の十二支で説かれる輪廻苦）。

このような自己中心的、利己的な世俗の真理、倫理は順次、本

来的な共同社会の家族、利益社会の企業が地方、国家などのグループに枠が広げられ、各人各様に使い分けられている。「国家の世紀」は歴史、社会の進化の上で漸く国家レベルに達したが、今や地球生命体系を根本として、地球規模で実現すべき地球レベルに転換しなければ破局に至る窮況に迫られている。巨大組織化した宗教、国家、企業等の集団やそれを動かす個人の妄信、盲動が全体普遍の真理、倫理を犯し、いかに多大の被害損害をもたらしているか計り知れない（「一國主義」や「原理主義」の利己、罪惡は現に見聞されているが、「国家」、「宗教」の再検討、再編成、再超克が不可欠である）。

教育の分野でも差別（女性、貧者、人種、言語、知識偏重、格差拡大、選別教育等）、搾取（利己主義、競争原理、優勝劣敗、経済優先、権力崇拜、選良課程等）、殺戮（国家主義、国家主權、愛國忠誠、軍事教育等）が宗教、国家、企業、報道機関等により「隠れたカリキュラム」として組み込まれ、自らの權益を拡大しようとしている。その利權優先は生命輕視、倫理無視にいたり、内外に脱落、逃避、反動、暴力、学級崩壊、教育破壊等を生み、責任の擦り合い、法律のねじ曲げや改変に至る。教育の倫理、真理を無視した三毒を去らねばならない（教育の主体、目的、手段等も徹底的な再検討、再編成が不可欠である）。

三 解決

誰も何も無から生起したのでもなく、一切から独立して存在するものでもない。一切は因縁生起であり、一切と無限に相依、相對である。これは帝釈網にたとえられる。インド神話の最高者、天帝釈は世界に網を広げるが、その結び目には水晶の珠があり、各々が互いに、一切を、無限に映しあっている。あるいは個物と全体を泡と海に比定してもよからう。泡はかつ結び、かつ消えるが、海はいわばその根源、本性である。一切はビッグバン以来のものを因縁として、一切生命は遺伝子構成を分かち合って四〇億年生きてきており、一五〇億年の因縁に結ばれている。これが本来の姿である一寸の虫にも一寸の魂があり、一身の命にも一切の心がある。いかにして殺し、盗むことが許されようか（しかも大々的にこれを行うのが「国家」「宗教」への狂信、兇行である）。我は克己／無我、全／和によってのみ克服される。我見／我執の知／行（真理／倫理）、部分的な真善美は完全な真理／倫理でも全体的な真善美でもない。無我の全体／健全が普遍的真理／倫理に安住できれば問題は起きない。山川、草木は真理／倫理を全うしており、動物、人間はこれに反って抗し、逆らっている。全体的自然の道理、普遍的人間の倫理に目覚めて生きる道程が教育の根本的課題である。真理に徹底した真人、倫理を全うする聖人に育ってこそ、一切と共に育ち、育て、教えることが可能となる。宗教は本来そのような崇高な教えであり、聖（Holy）に再帰、再・結合（re-ligare : religion）することである。それは「畢

竟「究極」の真理、倫理に結合、合一して「安心、立命」することである。それは「全体 (wholly) の智慧」、「健全 (whole some) の実践」であり、教育の究極でなくて何であらうか。

ブッダは「宗教とは修習である」と言われ、鈴木慎一は「育のない教育は教育ではない」と言われた。利己の利益を押し付ける議論、行動の前に自ら育ち、共に育つことが不可欠である。真理、倫理の現成は誰にも、どこでも、いつでも可能であり、初中後に善であることは「来たり、見よ！」とブッダが言われたとおりであり、また先人が実証したとおりである。

誰でもただ座れば我見、我執、我慢の出でくる前の本来の面目を見ることができ、業風に靡かず、寒暑に耐えて数千年生きる「庭前の柏樹子」のごとく成れる。業をやめて坐禅瞑想に入れば、本来の無分別、無束縛に戻ることができ、無我、不死の涅槃を実証し、明悟を体得できるのである。そこに「尽十方一顯明珠」の境涯が現成し「山河大地心」も完成される。大地大海の心が育成されれば環境問題群、人間問題群も解消されよう。小知偏重の狂育から、大行尊重の共育に至れば人間問題も解決される。

教育はしたがって無我／全体／健全の教授と受育である。教育の五原則（鈴木慎一「才能の法則」は、より善い指導、より善い方法、より善い環境、より早い教育、より多い訓練）は理想的には無我の健全体系に徹した「存在－法則－世界」（仏－法－僧）にならう「早習－多修」の二つ（修習）を加えたものとなる。即

ち、妄執により限界あるものから真修により無限のものとなる「可能性の陶冶、引き出し (education)」である。あるいは「習い性となった」三毒の悪習、悪業をやめる「退歩の学道」でもある（滅悪、不生惡、増善、生善は四正勤といわれる）。

したがって、師資（教師学生）は社会自然環境と共に修行覚悟が必須で、これにより業体から法身に誰でも至ることができる。そこに自己中心の有限の泡沫は消え、無限的大海生命が現れ、利己の錯誤、束縛を離れることができる。物質と権力を買う、文字どおりの金字塔構造「文明」の五禍（錯誤、束縛、差別、搾取、殺戮）から循環的生命「文化」の五福（覚醒、自由、平等、博愛、平和）に至ることができる。「個人主義」、「資本主義」、「原理主義」等の部分主義、教条主義が聖性も正義もないことは論をまたない。「戯論は決裂し、行動は結合する」のであり、倫理、戒律を守ること、実行が救済、天的生命への契約、確約となっているのである。ガンジーは「平和への道はない、平和が道である」と言った。五禍をまず実際にやめることである。そうしなければ五福は実現しない。

地球問題群即ち人間問題群の解決は人間の教育にある。文明環境に育った大人は文化的には未熟であって、自ら変わり育つことが不可欠で、これ無しには教えることはできない。聖性＝全体的健全性 (holly = wholly + wholesome) を体得してはじめて大人（真人、聖人、全人）といえ、ここに初めて真理、倫理の教授、

育成が可能となる。ここに解決、救済があり、即今当所の極樂、地上の天国／樂園が実現される。

聖性は宗教が目指すものであるが、それは一切と共、友であることである。Mitra, Mihra, Maitreya, Messiah 等の未来仏、救済者は一切の可能性を無限に引き出す教育の仕事であり、極樂浄土は常にこの世界に実現すべき倫理の課題である。

人間も狼に育てられれば、狼に等しく無限の可能性から能力を引き出す。松のことは松に聞き、戒香を時所を超えて嗅ぐのは、一切が命を共にし、心を友としてきたからである。四〇億年来的の遺伝子を分け合う生命共生者であるから、星の真、花の美、戒の善、定慧の聖も可能となる。解決は本性に帰ることである。

四 方法

地球時代にあつては個我、個群（国家、種族、宗族等）を超えて地球生命に習った真理の覚醒生活（5S）をする必要がある。

5Sは、

Systemic	一体システムとして
Sustainable	維持可能で
Saving	節約・救済し
Safe	安全で
Simple	簡素な生活

これに対応し地球原理にならった地球倫理（5L）の枠組みを

採用しなければならない。

5Lは、

Law	縁起法則により
Life	生命尊重し
Love	愛情で分かち合い
Liberation	執着から解放され
Lifelessness	嘘をつかない人生

地球倫理とは一九九三年、第二回世界宗教会議は「地球倫理宣言」を発したが、これは諸宗教共通の倫理、一、不殺、二、不盜、三、不偽、四、不淫の最後を「男女の平等な共同精神」とした四箇条を全ての人が守るよう要請したものである。

右記の5Lは、これに根本原理／法則である因果法／縁起法のLawを加えて、対応の5Sや、以下の5R、5Aに合わせ五つのLにまとめたものである。

一切は因縁生起（縁起）であるという普遍真理に従って、地球思考（情報流）

5Aは、

Access	情報取得
Assess	評価
Agree	同意
Advise	忠告
Amend	修正

地球行動（物資流）

5 Rは、

Reduce 削減

Reuse 再利用

Recycle 再循環

Rearrange 再調整

Restore 再生

といった原則を教えることが、教育の根本的課題である。

部分から全体への枠組み転換は倫理のみならず教育においても必須であって、小我、短期、浅慮の物、力、それを買う金のための知識偏教から、全体、健全、無限の真、善、美の智慧、全育を自己、初中後に求め、究めていかなければならない。幼稚低級なもの、の枠組みにはめられない、陥落されない教育を修習していかなければならない。才能教育の教育現場では、「一人の脱落も出さない教育を実践」している。「急いで事を為損じ」ない、包括的共生、包容的共育を実現しなければならぬ。共育は学校だけでなく、家庭、地方、国家、国際、自然の全領域で協議、協力、共調、共働していかなければならない。

結 論

過去現在には大海のごとき無限の生命システムの真理、倫理ではなく、泡沫のごとき限界ある我見、我執で妄執で争ってきてい

る。真理、価値、倫理の偏見、偏執を全体見、健全道に今こそ枠組み転換し、一切が共々友となる極楽／浄土を修証、教育しなければ未来はない。

自我と自我集団（グループ）の小、短見、迷、妄信、輕率盲動の枠組みから、地球と宇宙規模のシステムの大、長観、確、正信、如法動作の枠組みへ真理、倫理を転換し真の自由（free-dom, Sanskrit: *prīya-dhāna*, 親愛の領域、親しく知り、愛情の世界にある）を得、平等、愛情、平和、即ち、五福が普遍的に実現される世界が教育・共育の目標、価値であり、実践、実証である。真理と倫理は不可分であり倫理の教育こそ教育の倫理であり、不可分、不可成である。「国家百年の計は教育にあり」「宇宙無窮の計は教育にあり」「真理なくして倫理なく、倫理なくして真理なし。」「知行合一は教育にあり。」

部分から全体へ、限界の金字塔文明から無限の生命系文化への枠組み転換は、即今当処に真理、倫理が誰にも可能であることに安心、立命して、当面以下の目標を掲げられよう。

（物・力から）心・命の教育へ
（競争から）「共生」の教育へ
（他律から）自治の教育へ

これは自他共に、初中後に真善美聖一体に完成できる真理、倫理の自覚、自治である。ここに、個々一切が全体共生進化の宇宙生命の歴史に全体調和／均衡（wholly）健全融和／代謝（whole

some)をもって、全的体系(holy system)の全的生命／生活(holistic life)が可能となる。

人間として生まれることは、海の底にすむ目の見えない亀が百年に一度海面に浮上し偶々、当て所なくさまよう浮き木の穴に首をはめる程に難しい稀なことであるが、更に稀で難しいことは目覚めの道(仏道)に遇うことであると、「盲龜浮木」の譬えをもって、「無明長夜」から目覚めることの困難をブッダは論された。

一人一人の業は気づかれなくとも、共業は甚大な結果をまねく社会から教育された三毒(貪瞋痴)を目覚めの道の三学(戒定慧)で再教育し、知行を覚道に修行し極楽浄土の世界を享受することが畢竟の所ではないであろうか。三心(大心、老心、喜心)を修証するのが新しい「倫理・教育」である。自己本来の生命は一切時処と共生の大海の如きもので、泡沫と誤認せず、全的健全に発現機能させることであり、そこに教育の機能がある。

「不死への道は目覚めであり、

死への道は目覚めてないこと。

目覚めぬ者は死者のごとく、

目覚めた者は死ぬことがない。」

(法句経)

(一) 吉田収著「目覚めの道」(北樹社、東京、一九九三)、H・キュー

ング/K・J・クシエル編著、吉田収訳「地球倫理宣言」(世界聖典刊行協会、東京一九九五)、「地球倫理―人類の未来のために」(世界聖典刊行協会、東京、一九九四)、H・キューニング著、吉田収訳「今こそ地球倫理を」(世界聖典刊行協会、東京、一九九七)等参照。

(2) 同上、吉田収「仏戒と地球倫理」(印度学仏教学年報、五〇一、日本印度学仏教学学会、東京、二〇〇二)等参照。

(3) 「地球倫理宣言」では「四つの取り消し不能の教令」として、

- 1 非暴力と生命の尊重の文化への献身
 - 2 一致団結と公正な経済秩序の文化への献身
 - 3 寛容と真実の生活の文化への献身
 - 4 男女の平等な権利と共同精神の文化への献身
- と章立てしている。

なお、元国家元首、学者等により構成されるInteraction Councilは「地球倫理宣言」にならって「普遍人間権利宣言」(世界人権宣言)に対応するものとしてその五〇周年に発布するように「普遍人間義務宣言」を作成し国連に提出したが、利国主義によって未だに実現していない(これが公布されれば戦争は出来なくなる)。

The Past and Future of Ethic-Education - Paradigm Shift
Now!

(よしだ・おさむ、宗教学・倫理学、東洋大学教授)